

## 5. 救護・公衆衛生活動を支えて



### 救護活動はたくさんの人々に支えられて

保健課 係長 大野千恵子

#### 震災の日

4月1日に全面復旧となったJRで出勤するようになってからも、西宮北口発の阪急の代替バスに出会うたびに、一瞬不覚にも涙ぐんでしまう。それはまだ長時間通勤を余儀なくされている人たちへの共感と、自分自身の長く辛い通勤や、さまざまの思い出につながるからである。

1月17日未明、東灘区で地震に遭った。それはゴウオーという地鳴りと共に始まり、かつて経験したことのない地底から突き上げてくるはげしい揺れであった。今にも倒れんばかりの家のきしむ音。とっさに飛行機が落ちてき、直撃されたのかと思った。恐怖のため、逃げ出そうとしたが、立つことさえできない。縦に横に振り回された。数十秒後、タンスといわず、冷蔵庫といわず立っているものは全て倒れていた。ほの白んでくる冬空の下では、すでに4～5ヶ所で火の手があがっているのが見え、言いようのない悲痛な気持ちに襲われた。

しかしその時点では家が倒壊していなかったもので、どれ程の地震かも分からず、もちろん情報もなく、こんなひどい大惨事を引き起こしていたとは到底思い及ばなかった。ラジオから辛うじて得られるニュースと言えば大阪や西宮のことばかりであった。午前中一人出勤していた門間さんに電話が通じたのを最後に通信もとだえ、交通機関もすべて途絶していることが分かり途方に暮れた。つぎに、東灘区役所へと思ったが、課長から「こっちに来てくれ、人がいない。」とのことであった。後で判ったが、東灘区は市内でも最大の犠牲者をだし、保健所にも次々と遺体が運び込まれ、大変な惨状であったという。

その日は一日中大きな余震が続いた。水もなく、電気もなくこれといった食糧もなく寒さのなか夜を

迎えた。その日、鈍く朱色に輝く大きな月が真っ暗な玄関の石畳に長い光を落としていたのが忘れられない。絶え間なくくる余震に怯え中学校に避難した。

救護活動に向けて

着替などで膨らむリュックを背に、緊張して出勤した朝、職場は鳴りやまぬ電話の応対と医療チームの情報や受け入れで騒然としていた。

避難者は中央区に86ヶ所、32000人、しかもまだ増え続けていた。震災の翌未明には、もう到着していたという日赤岡山病院や県立加古川病院の医療チームは既に巡回による救護活動を始めていた。重傷者や重篤な患者は、市内や市外の病院に搬送され、救護所は感冒や高血圧などの持病に対応することが求められていた。避難所生活の酷しさから時間が経つにつれ老人を中心に不眠や便秘、精神不安などの症状を訴える人が増えてきていた。

中央区の医療機関も大きな打撃を受けた。中央市民病院も例外でなく、水が止まり、ポートアイランドに渡る橋も損壊し、一時は患者搬送もできない状況であった。中央市民病院は「受け入れが難しい」の情報はしばらく尾をひき、搬送もままならなかった。また橋が使用可能となっても渋滞のため自動車でも数時間を要した。

21、22日の救急受入れの情報をまとめたときは、あまりに医療機関が機能していないので不安な気持ちになったのを思い出す。当初は、多くの避難者に少ない医療チームでどのように対応するか、その効果的な配置が緊急の課題であった。加納課長がその指揮に当たっていた。

20日になって大阪府・市の医療チーム5班、総勢30有余人が薬品や食糧をどっと携えて支援のため到着した。これをかわきりに支援体制は一段と充実した。医薬品もこの頃から沢山搬入されるようになり、医薬部にも多くの人手を要することとなった。

しかし問題もあった。移動手段を持たない医療チームの効率よい配置が急がれた。避難所からは次々と医薬品の要請もあり、これを届けなければならない。どうしても運搬手段が必要だった。区内の道路事情は最悪で至るところ寸断され、ほんのわずかな距離ですら迂回と渋滞で想像をはるかに超える時間を要した。何としても機動力を。

「ボランティアの運転手さんは、いませんか！！」区役所前に車を止めて待機中のボランティアと覚しき人に一人ひとり声を掛けながら走った。22日、最初に来てくださったのがNさんである。夜は自分の車を宿所としながら10日間も続けてくださった。

その後、登録中の方に電話をすると相次いで三、四人の方が駆けつけてくださった。24、25日のことである。毎日往復6時間あまりをかけて通ってくださった方もあり頭のさがる思いであった。困難の中、互いに情報を交換しつつ、時にはワゴン車から単車に乗換えるなど臨機応変に、ひたすら運転という仕事に徹しておられた。、みなさんととても明るかったのが印象的である。

明るいと言えば、自らも被災しながらボランティアをする人もいた。中央区の開業医であるY先生もその一人である。診療所、自宅とも全壊し、家族で車の避難生活をしながら救護活動にあたってくくださった。今になって、このような人々に出会えたことは私にとって大きな心の財産となった。

医師、看護婦ボランティアの申し出も実に沢山あった。電話は勿論、直は遠方から保健所を訪ねてこられる方も多かった。寝袋や食糧をいっぱい詰めたリュックを負い来てくださった。みなさん熱い思いで駆けつけて下さったのがこちらにも伝わってくる。しかし、希望どうりのコーディネートができなかったこともあり、しばしば心苦しい思いをした。薬剤師のボランティアの方々にもずいぶん長期間にわたりお世話になった。パソコンを駆使して大量の薬剤を効率よく管理して下さったり大いに助けられた。こうして2月上旬は、垂水保健所の応援も加わり最大の人員にふくれあがったときであった。

人の往来も増え、電話はひっきりなしにかかり、早朝から深夜まで毎日が時間の観念もなく、息つく間もなく過ぎていった。

さて事務職の私たちには何ができるだろうか。まず指揮命令系統を明確にするため緊急時の事務分担を決めることである。医療チームの派遣計画と記録、避難所の状況把握、医療情報の収集・提供、ボランティアの受付、配車、医療チームの道案内、控室・宿所の整備、食糧・物品の調達、破損機器の調査と予算要求、職員配置、所内外の広報などを決めた。勿論この他にもたくさんあった。区内地図をコピーしたり（なにしろ地図はあつと言う間に無くなった。）トイレ用の水汲み、医療チームの俄か宿舎にあてるため床にマットを並べたり、連絡に走り回ったりである。またあい間を見ては、ガラス器具の破片が散乱する検査室や健診室、事務室、倉庫等を片付けていった。なお保健所ニュースの発行については滋賀県チームに負うところが大きい。

医療チームも充実し、救護所も安定してきた24、25日にかけて、突然多くの自治体から相次いで電話やファックスが入り、「今から支援にいく」ということであつた。それもひとつやふたつではない。中には1チーム22人というところもあり、予期せぬ出来事でみんな慌ててしまった。それは厚生省の指示によるものであることが後で判明したが、情報はこのようにしばしば混乱した。

いずれにしても震災から一週間にして、ぼつぼつ24時間常駐体制がとれるようになった。ある日、ボランティアの女性医師から「薬品と救護室にお花を…」という要望があつた。薬品はまもなく用意できたが、当時、花はどこで求めてよいかわからなかつた。やむを得なかつたとはいえ応えられなかつたことが、今も私の心のすみに残ってしまっている。あの時、救護所にささやかでもお花を生けることが出来たら、どんなに心の慰めになりえたらうか。

仕事をふり返って

- 情報収集について

初期において避難所の実情やニーズの把握が不十分であつたため医療チームを派遣すると既に他所からはいつていたことがあり、貴重な時間を無駄にした。

- 医療チームと保他所の関係

2月13日、3月7日の2回、区医師会も交えてミーティングを実施したが、もっと早い時期に持てなかつたらうか。早く互いの情報を交換し、意見を述べあうことにより、より協力体制が図られたのではないか。

- ボランティアの受入れについて

緊急時には難しいとは思ふが、人がやってきて、仕事を願ひするのではなくてどこにどんな仕事があるか事前に把握しておく必要がある。

- 総指揮について

指揮をとる一人にどうしても仕事が集中してしまつた。即座に判断し、指示する必要からやむをえないことではあるが、もう少し援助をすべく方法は無かつたか。

- 写真の記録について

当初より活動の記録の一つとして考えてはいたが、結局心情的にカメラを向けることができなかった。他の職員も同様の思いとのこと。しかし必要ではなかつたか。

とにかく救護の立場から、このたびのような緊急事態に一番の頼りとする中央市民病院が、ポートアイランドという島ではなく、もっと身近な市街地にあればよかつたと思う。

全壊の家屋の主は勿論、電気は消え、水道もガスも出ないので、近隣の人々も避難してしまつた。ほとんど人気のない町内は、夜になると暗闇に沈み、あたかもゴーストタウンのような不気味さが漂つた。そして私もやむなく親戚に身を寄せ、長い辛い通勤が始まつたのである。

ペシャンコに潰れた家、まるで踊っているかのようにあちこち傾いてしまつた家々は、私たちに何か

を訴えているようだ。肉親を失い、住む家を無くした人々のその深い傷はいつになったら癒されるのだろうか。そうでなくとも、みんな大なり小なり心に傷を受け、何かをひきずっているようだ。日が経ってもまだそれは消えない。

---

(c)1995神戸市中央保健所(デジタル化：神戸大学附属図書館)

## “ボランティアの受付”を振り返って

保健課 事務職 古田 与利子

震災後約3ヶ月、ボランティア受付、他都市からの医療チームの名簿整理等を主に担当しました。平日、休日を問わず、医師・看護婦・薬剤師・運転手等200名余りの方が、中央保健所に応援に来てくださいました。「何かできることがあればと思って」と重い荷物を持ってかけつけてくださる方もおられました。仕事の合間をぬって、休暇をとって遠方より私達の街神戸に来てくださった方々には心より感謝いたします。と同時に、今まで何度かTVや新聞で他府県の災害を知りながら何もできなかった自分を恥ずかしく思いました。

ボランティアに来られる方のピークは、1月20日過ぎから2月中旬頃で、避難所をはじめ本部救護所や薬剤・紙オムツ等衛生用品の配布、医療班の送迎や物資の運搬等様々な所で力をかしていただきました。しかし、その後は医療班の方々にも応援いただきボランティアの方に外での援助をお願いすることが少なくなってきました。本部での診察や介助、本部からの巡回、薬剤の配布などを主に依頼するようになってきたのですがボランティアとして来られた方の中には、避難所や避難所以外で援助の手を待っている人の所をまわりたいという思いをもって来られた方も多く、大きな荷物を持って来られたかたに申しわけなく思いました。

また、市内の病院からの応援もありました。ボランティアと医療班、市内からの応援、これらをうまく調整すればより一層被災者のニーズに応えられたのではないのでしょうか。といっても、この度のような大規模な災害では調整の余裕などないのが現実です。運転手として来られたあるボランティアの方は、「我々の中にはボランティアをしたいと思っている人が沢山いる。この人たちを登録する制度があれば緊急時に対応できるのに」と言っておられました。全国からの暖かい手をできる限りたくさんの人々にさしのべられるようこの度の経験を生かし、緊急時のボランティア受付について検討が必要に思います。

## 駆け抜けていった日々の記憶から

保健課 事務職 龍野 和美

その日のことー

早朝から市役所の本庁舎に出かける用事のあった私が、朝食用の野菜を炒め始めたその時に地震は起こった。すぐにガスの火を消し、倒れかかるレンジ棚と冷蔵庫を体で押さえながら、余りの揺れの凄さにただ茫然とたたずんでいた。すぐに家族を居間に集めて、暗闇の中で携帯ラジオに聞き入ったが、状況をはっきりとは掴んでいなかった。

外が少し明るくなったので一人外に出ると、まわりのマンションにはさほどの被害はなさそうに見えたが、数件の木造家屋は崩れ電柱が倒れかかっていた。妙に胸騒ぎがした。

灘区の私の実家には、1階に両親、2階に妹夫婦と幼い二人の子供がいる。家具に子供が押し潰されているのではないかと電話をするとコールはしているがでない。無事なのか？余震の中、妻と娘に散乱した室内の片付けと後の連絡係を託して、私は10歳の息子とともに東灘から灘へと車を飛ばした。信号の消えた薄暗闇の中、戸惑いながら走った山手幹線沿いの光景から、家族の死を予感した。私の車を見つけて早く早くと手を振る妹夫婦と、茫然と座り込む母のかたわらに、畳の上に横たわる屍が一つ見えた。その小ささから姪かと思いつつ車を止め、身近にみたそれは、思いのほか小柄な父であった。

多くの木造家屋と同様、1階部分は2階に完璧に押し潰され、母を外に追い立てた父は、頑丈な家の象徴であり自慢でもあった重く立派な梁に直撃され、その痛みにしばらくは呻き続けていたという。近所の人達が何とか引っ張り出そうと努力しても、暗闇の中、道具が何もない状況下ではどうしようもなかったという。それでも少し明るくなったらすぐに、太い角材を捜し出して梁を押し上げ、遺体を出してくれた。感謝の言葉ありません。

なかば無理と分かりつつも蘇生の可能性を求めて父を乗せて車を飛ばしたものの、神鋼病院は停電で前庭には遺体と重傷者が所狭しと並び、中央市民病院へと向かえば橋の手前で通行止。いよいよ気持ちを決めて灘警察へ死亡届を出したものの、教えられた遺体安置所の区民ホール1階は水浸しで、会議机の上に寄せられた遺体が並んでいっぱい。次に教えられたお寺へ遺体を運びほったしたのも束の間、検死が済めば遺体はよそに移せというし、火葬もそれぞれで勝手にやりなさいと言われ、どの家族も呆れるやら、怒るやら、途方にくれるやら、これでは火葬に漕ぎ着けるまでは職場に出られないと観念して保健所や管理職のかたがたの自宅に電話をしても全くつながらない。一方、あらゆる葬儀社も殺到する依頼に混乱を極め、とりつくしまもない。結局、昔馴染みの僧侶の紹介で葬儀社が決まり、分刻みの火葬上で父の密葬を終えることができたのは22日大震災の発生から5日後のことであった。

ようやく職場へー

1月23日によりやく保健所に出勤できた私のいでたちは、がれきの街を走り回れるように、キャラバンシューズに軍手、防寒服、しかしながら、実際の職場では、医療チームやボランティアの人達がひしめき合い、また、これから来所しようという医療チームからの電話や、ボランティア希望者の来所などで大混乱。とても外に出て何かをできる状況ではない。とりあえず避難所への派遣状況がみんなに見えるように、数人の職員で衛生課の大きなホワイトボードを保健課長席の横に運び、開設できた救護所と担当する医療チームが一覧できるようにした。

この時期には常設できる救護所は数ヶ所で、他の避難所へは巡回で対応せざるを得なかった。しかし

その後すぐに、北海道から沖縄まで様々の府県や市町から多くの医療チームやボランティアが駆けつけてくれたことで、常設の救護所が20ヶ所以上も開設できたことは、驚きであり感激でもあった。そして、次には24時間体制の救護所開設へと至るまで、本当に疾風のごとく日々が過ぎていく。

ようやく救護の体制も、それに関する報告書等の事務の流れも落ち着いたかと思うと、今度は一転して、救護所の撤退に向けた調整が国を通じて本庁から指示される。まさしく状況に振り回されながら、とりあえず目先のことを片付けるしかできない。そんな対応の仕方に空しさを覚えたのは私だけだったのだろうか

振り返って思うことー

災害対策の業務として私がイメージしていた被災現場を駆けずり回る仕事と、現実のそれが完璧に違っていたことで、事務職である自分に一抹の寂しさを感じた。また、ある程度やむを得ないことであり、各種の情報の伝達で精一杯ではあったが、それでも、保健所としての業務の進め方について、内部でのディスカッションの場が必要ではなかったか。救護活動に関しても、医療チームに一定任さざるを得ないものの、保健所との連絡会議などで意見をお聞きするだけではなく保健所の方針や考え方を適宜お伝えできなかったことを申し訳なく思っている。

職場での泊まり込み体制や通勤の大変さなど印象深いことがらは多いが、私達の経験の何をお伝えすることが、お世話になった他都市へのお礼になるのだろうか。一方的な経験の押し売りではなく、本当に求められる事にお答えしたい。他の都市の皆さんとの交流の場などがあれば、そのような立場で積極的に出かけたい。

## 震災のときを振り返って

元保健課主幹 管理栄養士 吉田 睦子

あの美しかった神戸の街はいづこに...

震災後、半日がかりで瓦礫の間を縫って出勤して目に入った光景は予想以上のものでした。

昭和55年12月中央保健所オープンに向けて、市民の健康教育を目指し食生活の実践指導の場所として、完成した栄養実習室がものの見事に破壊され、足の踏み場もなく、勿論ガス、水道も不通の状態を目の当たりにしました。この期におよんで市民のために保健所職員として、管理栄養士として、仕事の優先順位は？　すごく気持ちのあせりを感じました。

何はともあれ、職場が少しでも機能するようにもって行くことが先決と倒れた冷蔵庫、調理台、ロッカー類を起こし、壊れた食器類を整理していた間に、緊急時の業務分担も決まり、栄養士は救護所への派遣医療チームの健康管理（食事の提供 朝7：00、昼12：00、夕17：00）ということになりました。水もガスもなく調理機器類も大半が破損した状態の中で、しかも食品の調達もままならない状況での食事づくりは大変なことでした。水は他の職員の協力によってB1Fから5Fまでポリ容器で運んでいただき、ガスは始めは携帯用ガスボンベを使用し、途中からプロパンガスの併用になりました。

食品は市外から通勤の職員の厚意により自宅から運んでもらったり、滋賀県を始め他県の医療田の持参食品や本部からの残品提供などを受けました。また、作業は社団法人兵庫県栄養士会から派遣されたボランティアさん及び、垂水保健所からの応援等により細々ながら周辺の店舗が開店するまで（2月末）食事提供を続けることが出来ました。

40日間という短い期間でしたが、あの寒かった1月～2月、避難所での救援活動を終えて帰って来た人々から「温かい汁物の味は格別です」といって喜んでくださったことは大変印象に残っています。

2月始めからは社団法人日本栄養士会会員による避難所での炊き出しボランティアの調整も始めました。更に3月からは、避難所における乳幼児食及び慢性疾患の患者食の栄養相談に応じたりと日時の経過に伴って対応も変化して来ました。新年度はますます震災後の市民の健康管理にふさわしい栄養改善事業の展開をしていくことが大切だと思います。

私は平成7年3月をもちまして神戸市を退職いたしました。永い市職員生活の中で最後が一番思い出多い年となりました。多くの方々のご協力によって、不十分ながら保健所での食事提供、避難所での炊き出し、栄養相談等いろいろな活動出来ましたこと、厚くお礼申し上げます。

平成7年5月5日

## 震災に伴う炊き出しの思いで

保健課 管理栄養士 岸川 幹子

始めて出勤した、1月21日（土）各都道府県から援助部隊が入り、ボランティアの方が増え、ごった返えしていました。

栄養実習室に入り、愕然としてしまいました。倒れたガス台、倒れたロッカー、砕けた食器の山、造り付けだったはずの流し台が歪んでいました。これが、あの実習室かと思うと、地震の凄さを改めて感じました。

一つの調理台を片付け、地下2階のタンクから水を運んで、医療班の方々や被災した職員の炊き出しをスタッフが起き出す迄に行っていたのは、所長でした。得意の調理の腕を奮って豚汁を作っておられました。

私達が来て、替わって21日の昼食から作り始めました。

それから、朝、昼、夕、せめて暖かい汁物だけでもと、2月28日まで続けました。管理栄養士の主幹も担当者も一緒になって多い時は200食近く炊き出しをしました。途中からボランティアの在宅栄養士さんも2名手伝って頂き、配給のお弁当に不足する野菜を少しでも多く摂ってもらうよう、具たくさんにし、薄味でもおいしくをモットーに頑張りました。

材料の野菜は被災を免れた職員の家から、滋賀県の医療スタッフから、沖縄県の医療スタッフから等々いろいろな方々の協力を得て、また地下2階からの水の運搬も男性職員の手を借りて、私達は調理に徹していました。返ってくる「アリガトウ、おいしかったです。」の言葉がとても暖かく被災した現実を忘れ、なぜか、とても充実した日を過ごすことができました。

実習室が保健所スタッフや区役所職員のみなさんとのコミュニケーションの場となり、各自治体との交流を計れたことをうれしく思い返します。

## 復興への道

保健課 放射線技師 近藤 正志

平成7年1月17日午前5時46分大きな揺れと共に目が覚める。今までにない大きな地震だとすぐにわかった。唯、自宅が震源地から離れていたため大きな被害はなかった。様子がわからないので、テレビをつけたが、停電のため映らない。職場に行きたいが、どのようにしたら良いか思案した結果、車で出勤することにした。午前9時前に自宅を出、渋滞を避けるため国道2号線等幹線を避け三木から北区を抜け六甲山の北側から新神戸トンネルを通過して三ノ宮へ行こうとした。しかし、家を出て30分もしないうちに三木へはいった途端、渋滞にまきこまれてしまい、身動きが取れなくなってしまった。ラジオからは、被害の状況がいろいろ流れていた。職場へ何度も電話するが通じない。しかたなく家へ引き返して、連絡を待った。午後になってから職場から電話があり、少しだけ状況が分かった。当日は自宅待機した。

次の日、1月18日に職場から電話があり、食糧と水が不足し、且つ出務者も少ないとのことで、なんとか出務しないといけないと思い、車にて出勤し、5時間ぐらいで職場に着いた。

まず、着いてから目にしたのは、以前からは想像もつかない風景だった。ロッカーは倒れ、机は移動し、みるも無残なものだった。それらを横目に、まず水を確保することと、各自治体からの医療班への対応が主な仕事だった。

1月19日～2月2日の間は、和歌山県及び大阪市の医療班と共に、各避難所を巡回した。殆ど、大阪市の救急車であった。当初は、かなり重傷者がおりこれから先どうなるのか心配した。しかし、4～5日位で落ち着いてきた。内容も外傷から、かぜや高血圧といった内科的な疾病に変わってきた。

2月3日～5日は、タイ国の医療班と共に保健所の近くの避難所へ巡回医療をした。Dr.の一人が日本語が話せるのでうまくいった。タイから来ているのと、Dr.が丁寧で且つ親切だったため、避難している人からたいへん喜ばれた。

2月6日位から区役所の依頼により、磯上公園にて、罹災証明の発行を手伝う。初めての仕事のうえ罹災したひとの数が多い為、応対に四苦八苦した。罹災した人の生の声が聞けるかわりに、それだけに、悲惨さがじかに伝わってくる。3月10日まで手伝った。

3月11日からは保健所に帰り、3月16日から始まる避難所検診のための準備におわれる。この時初めて従来の仕事に近づいた。

3月16日から3月31日の間に16小中学校（避難所）に対して検診を実施した。受診者数は、801名であった。

4月に入ると医療班も少しづつ撤退して行き4月末をもって完全撤退した。

今考えると、震災後は一日一日が重要で長く感じたが、医療班が撤退する4月末までを考えると、3箇半月は短く感じた。しかし、まだ、現在も約3万人以上の方が避難生活を送っているので、まだまだこれからも大変な日々が続くので、現時点では、最終的な結論は言えないが一日も早い復興を目指して頑張りたい。

## 震災をふり返って

保健課 運転手 久常 耕一

私の震災での仕事は、主に医療班の送迎と医薬品の搬送・回収などでした。当時は交通渋滞で、朝通った道が、昼には通れないなど一度外に出るといつ目的地に着くのか予想もつかない状態でした。特に主要幹線は身動きの取れないほど車であふれ、その間隙を縫ってバイクと自転車が走っていました。緊急のパトカーや救急車のサイレンの音が絶えず聞こえ、夜やっと家に帰ってもその音が耳から離れませんでした。崩れた家やビルの間を走りながら、とにかく早く現場へ行きたいとばかり焦りイライラしていたことを思い出します。始めのうちはみんなが慌てているので人によって指示することが違ったり、誰の言っていることが正しいのか分からず、無駄な時間を過ごしたこともありました。

東灘方面へいったとき、亡くなられた方が道端にそのまま置かれているのを見て改めて今回の大地震の恐ろしさを痛感し、気の滅入る思いがしました。そんな中、避難所に医薬品を搬送していると、被災者の方やボランティアの方が一生懸命働いている姿、小さな子供がグラウンドで泥だらけになって遊んでいる姿を見て、少し落ち込んでいた私も逆に元気づけられたように思います。

今回の震災で私が一番感じたことは、これだけ大きな災害はみんなが初めての経験で、慌てるなと言うほうが無理かも知れません。しかし、焦らず落ち着いて仕事を一つ一つ片付けていくことが肝心だということです。私自身も緊急のため、やむを得ず無理な運転をしたこともありましたが、今考えれば、こういう時こそ慎重に運転し、二次災害を引き起こさないよう注意しなければならなかったと反省しています。

この震災で体験したことを今後に生かして行きたいと思っています。

## 保健所事務を担当して

保健課 事務職 吉本 繁美

私が出勤した時にはもうすでに保健所は動いていました。

庁舎は外からは無傷の様にも見えましたが、中に入ると壁は剥がれ落ち、書架類はほとんど倒れ部屋中に物が散乱していました。電気だけは回復していましたが、水道・ガスは止まったままでした。もちろんエレベーターも止まっており物の上げ下ろしは人海戦術です（エレベーターは長い間運転が再開できず階段での昇り降りはお年寄りや身体の不自由な方には大変だった事と思います。

そんな中で多くの方がいち早く救援に駆けつけて活動してくださっていました。次々体や団体の医療団が来て下さいましたが、交通が寸断された中を苦労してやっとの思いで保健所まで来られた事と思います。にもかかわらず疲れた様子も見せずに各救護所に出かけてくださいました。

しかし、区内の道路の渋滞もかなりひどかった様で車での移動はかなりの時間がかかったようです。荷物がなければ歩いた方が速かったようです。こんな時は自転車が便利です。荷物も少しなら積めるし歩くよりずっと速いしで町中にだんだん自転車の数が増えてきました。

事務所ではFAXと複写機がフル稼働していました。本庁等とのやりとりや、各救護所の医療班への資料の作成などで大活躍していました。故障でもして動なくなると困った事になると心配しましたが、幸い故障する事無くすんでホッとしています。記録紙の補充も心細い時もありました。直後は納入業者も被害を受けているでしょうし、物があつたとしても大渋滞に巻き込まれて納品がなかなか大変だったようです。普段は十分に物があつた簡単に手にいれることが出来ますが、直後混乱の時期には手元にあるもので何とか間に合わせなければなりませんでした私は事務職でずっと保健所の中にいましたので、実際の悲惨さを目のあたりにする事も少なく済んでしまいましたが、今こうして振り返ってみますといった何をしていたんだろうという気がします。何かバタバタと動き回っていたような気はしますが...

刻々と変わる状況について行けていたのでしょうか？あの混乱の中で、情報を収集し、周知・伝達することはなかなか大変なことだと思いました。時間の余裕もなく、何がなんだか分からないままでその場その場を動いていたように思います。それにしても多くの方々が温かい救援の手をさしのへてくださいました。皆様どうも有難うございました。

## － 体験・阪神大震災 －

保健課 事務職 三島 美智代

平成7年1月17日 早朝。

地の底から響いてくるごおーっという地鳴りで、いきなり目が覚める。何が何だかわからないうちに、家中が揺れだし始めた。全体がグラグラと波打つように動き、上の物がガラガラと落ちてきた。これは今までに体験したことのない大きな地震だ。

『きょうは半日、子供と家の片付けをしなくてはならないなあ。』  
わたしは、神戸市の状況をまったくとっていいほど知らなかった。

1月21日、昼前に自宅を出て保健所へ向かう。

父の車で県庁まで行くが、かなりの渋滞でいっこうに進まない。車を降りて徒歩で行くことにした。鯉川筋、JR元町駅付近、サンプラザ周辺などは見るも無残に破壊され、数日前の三宮の様子とはあまりにも違う、変わり果てた姿になってしまった。『いったい、神戸はどうなってしまったんだろう』

中央区総合庁舎にもかなりのクラックが入り、壁もあちらこちらが落ちていた。今まで見てきたもの全てを自分の中で否定しつつ5階の事務所に着くと、先に出勤していたみんなが忙しそうに走り回っていた。なぜかほんの少しの間会わなかっただけなのに、妙になつかしく、そしてホッとするものがあった。

書架の文書類はバラバラになったため、とりあえず片付けられており、何がどこへ行ってしまったのか探すのも一苦勞で、事務用品に至っては散乱していたので、初めのうちはあっちをごそごそ、こっちをごそごそといった具合でもっぱら物探しに明け暮れていた。

当初は私自身、何をすればいいのか、何から手をつければいいのかわからなかった。電話の対応も満足にできず、まるで新採の時のようにどうすればよいかわからずに、途方にくれている自分が情けなくて、はがゆかった。それに、神戸市職員としてへんな使命感にとらわれていて、弱音や愚痴などをはくことはいけないことだと思っていた。

とにかく、じっとしているのが嫌だった。今にして思えば、わたしはよく水運びなどの身体を動かすことを好んでやっていた。動きまわっていることで自分がそこにいるということを自分自身で確信したかったのだ。家でも職場でもやたら張り詰めていた。そしてやたら疲れていた。

震災後ある程度落ち着いてくると、職場内ではみんなの疲れがピークに達し、勤務ローテーションなどについて不平不満が出るようになった。また、他部局からの問い合わせなどで、同じ職員同士で変に無愛想であったり、高圧的であったりして、気分が滅入ることもしばしばあった。

保健所へはマスクなどの医薬材料のことから健康保険のこと、または社会保険事務所の所在地など、じつにあらゆる問い合わせがあった。担当外のことでもある程度の問い合わせに対応できるように、また、どこへ尋ねたら答えが得られるかなど、情報の整理整頓が次第に大切になってきた。たくさんの情報が氾濫する中で各パートに分かれ、事務職らしい仕事ができるようになったころ、気持ちの上で復興してきていた。

神戸市は着実に復興しつつある。時折、うしろを振り向くと、これからどうなるんだろうなんてとりとめもないことを考えてしまったりする。いろいろ考えて、いや、考えずに押しつぶされてしまったり

して...なんて、私って案外弱い人間だったんだなって改めて痛感した。

『何はともあれ私は、...TAKE IT EASY』

---

(c)1995神戸市中央保健所(デジタル化：神戸大学附属図書館)

## 地震を体験して

保健課 事務職 萱嶋 逸巳

地震発生から3ヶ月半が過ぎ、今思うと、「生きていて良かった」というほっとした気持ちよりも、「よく生きていたものだ」という驚きの気持ちのほうが私には強く残っています。

17日早朝は、私も多くの人々と同様にまだ眠りの真っ只中で、最初のかすかな揺を身体に感じた後、何がどのようになったのかあまり記憶に残っていません。ただ、2階から1階に下りて父と母の安全を確認した後、「次の余震がくるとやばい」という思いで、ねじまがった家の玄関を足で蹴破り、父と母そして愛犬を外に連れ出しました。外に出てはみたものの、辺りはまだ薄暗く余震が来るたびに恐怖を感じていました。5分が過ぎ、10分が過ぎ、集まる近所の人達と情報交換をしても正確な情報というのはまだ誰も分かってはなく、家が「く」の字に曲がっているという現実だけが私の目の前にありました。

幸い、私の住んでいた地域は電気の回復が早く、余震は続いてはいたが、冷える屋外に父を出して置くわけにもいかず、靴を履いたままで家の中に入り、テレビを付け、情報を取り続けました。しかし、いったい何が起こったのかその時はよく分かりませんでした。

時間が立つにつれ「いつ家が倒れるかもしれない」という思いから学校に避難することを決め学校に行くと、多くの被災者たちが私達同様に不安を隠し切れないのがよく分かりました。3日後親戚が父を引き取りにきてくれるまでの間、不安と緊張で空腹感はありませんでした。父の安全が確保され次に困ったことが愛犬の「ゴン」です。たかが犬ですが小犬の時から飼っているものにとってはされど犬です。犬を見殺しにするわけにもいかずどうすればよいか分からないまま日は過ぎ、やっと知り合いの獣医と連絡が付き預かってもらうことで身辺整理ができました。

保健所に出勤してみると、私の机の上に書類が乱暴に置かれており、また先輩の職員が慌ただしくしているを見て「私も何かしなくては」と思いました。しかし、出勤が出遅れたため周囲の状況が分からず、何もできない自分に対する苛立ちと、周囲の先輩たちに対する申し訳なさが強く印象に残っています。

そして、数日が過ぎ私は統計資料作成の仕事が与えられ、次から次へと来る医療団の資料作成と被災者の受診者数を整理していると1日1日が驚くほど早く過ぎていました。

自宅近くでは多くの人が建物の下敷きで亡くなっており3ヶ月半が過ぎ、死者が5千人を越え私がその中に入っていないことに今驚きを感じています。

## 震災時の仕事

保健課 事務職 西田 浩樹

私は就職して1年目にこんなにすごい経験をしようとはおもいませんでした。

震災後の私の最初の仕事は“水汲み”でした。当時、保健所は応援の医療班やボランティアの人々で膨れ上がり、飲み水やトイレ用の水が沢山必要でした。中央区全体が断水、当然区役所も水は出ませんでした。区役所地下2階の貯水タンクの水が利用できました。エレベーターが壊れて使えないため階段を使って5階にある保健所までポリタンクを運び上げます。真冬なのに下着一枚になってひたすら水を汲み上げました。

しばらくたって仮設の水道が5階まであがってくると、次は応援に来てくださった医療班の道案内をすることになりました。巡回医療班の担当です。案内にあたって、一番困った事は道路事情でした。前日までの道路が全く役にたたないことも度々で、そのため、ひとつの避難所で診療をしている間に次の避難所へのルートを確認しておく必要があり、事前に走って確かめに行かなければなりませんでした。また混雑の合間をぬって、医療班の救急車でサイレンを鳴らしながら走っているだけに、道を間違えるわけには行かず、責任と緊張でかなりのプレッシャーでした。[いかに効率良く医療班に仕事をしてもらえるか] ただそれだけを考えていました。

その後、2月の後半から、今度は区役所の応援に出向きました。磯上グラウンドでの罹災証明の発行手続きの仕事です。罹災証明の発行を希望される方に手続き日の整理券を渡すのですが、あまりにも数が多くて、指定日が一週間先のものであったりして、一旦避難して北海道や九州など遠方からこの手続きのために帰神された方もいて、また来なくてはならないためにひどく怒鳴られたこともありました。罹災でみんな殺気立っていたように思います。どうしてあげようもない自分が辛かったです。

ようやく、本来の住民基本健診の仕事に戻ろうとしていますが、いろいろな経験をとおして、つくづく地震はいやだと思いました。